

故郷への思いを描き続けた画家

岩橋 英遠



〔岩橋崇至氏蔵〕

今までの日本画と違う力強い画風で自然を描き続けた岩橋英遠という画家がいました。英遠は、一九〇三年、屯田兵の二世として、

滝川村江部乙（現在の滝川市江部乙町）に生まれました。

小学校を卒業後、農業を手伝いながら、絵を描き始めました。江部乙で成長したことから、農業に従事した経験は、後の岩橋作品の原点となっていけます。

もともと絵を描くことが好きだった英遠ですが、幼い頃に画家としての歩みを決定づける人との関わりと出会いがありました。一つは祖父との関わりでした。幼少期に英遠は、家の廊下に鉛筆で馬の絵の落書きをしました。それを日頃から厳しかった祖父に見つかってしまいました。叱られると思った英遠でしたが、祖父は「上手な絵だ」と褒め、その落書きを消さずに長く岩橋家に残したそうです。

そしてもう一つは、後に洋画家となる一木万寿三との出会いです。万寿三は英遠が小学五年生の時に、畑続きの隣の家に引っ越してきた一学年下の後輩でした。絵の好きな二人の少年はすぐに仲良くなり、農作業の合間を見ては江部乙の果樹園の中をスケッチして歩きました。そして、お互いの家をひんぱんに行き来しながら夜遅くまで語り合い、絆を深めていきました。やがて画家となる二人は、生涯にわたって友情を育んでいくことになります。

一九二四年、英遠は本格的に画家を目指して上京しました。英遠が二十一歳のときでした。東京に出た英遠は、意欲的に創作活動に励みます。しかし、この頃の生活は食事代にも困るほど大変苦しいものでした。そのようなとき、英遠の心の支えとなっていたものが、生まれ育った江部乙の風景でした。東京に出てからも、英遠は故郷の風景を思いながら作品を描き続けました。「何時でも困るとすぐ逃げる気になつてよくないのですが、例によって唯一の避難場所、故郷の果樹園です。」と、故郷への思い出をにじませた作品を描くたびに英遠は語っていました。

一九三四年、英遠が三十一歳のとき、地道な創作努力が実り、日本美術院展覧会に初入選しました。その後も多

く、作品を創作し、画家としての地位を確立していきま
た。

一九七三年、英遠が七十歳のと
き、幼少期の思い出を描いた『雪
戦会の日』を故郷の小学校に贈り、
故郷の子どもたちとの交流を始め
ました。この活動は、かつての故
郷で見た桜並木を復活させる植
樹運動に発展していきました。

英遠が展覧会のイベントに参加
するため、北海道にやってきたと
きのことです。母校の中学生が「江部乙という小さな町か
ら、岩橋先生のような立派な画家が世に出て、誇りに思
います。」と英遠に挨拶をしました。すると英遠は「江部乙
は小さな町なんかではありません。この町は私にとって、
とても大きなふるさとです。」と穏やかに語りました。中
学生は、まっすぐに英遠を見つめ、姿勢を正し、深々と頭
を下げました。

英遠は晩年こんな言葉を残しました。「ふるさとは山で
も川でもないことが分かってきました。自分の過去を記憶



『雪戦会の日』1973年 滝川市立江部乙小学校蔵

してくる人々の住んでいるところ、それがふるさとで
す。」

岩橋英遠の日本画は、今も多くの人々を魅了し続けて
います。

一九〇三	北海道空知郡滝川村江部乙（現在の滝川市江部乙町）に生まれる
一九一七	尋常高等小学校を卒業し、母を助けて農作業を行いながら一木万寿三と交流を深める（十四歳）
一九二四	画家を志し上京する（二十一歳）
一九三四	日本美術院展覧会で『新宿うら』が初入選する（三十一歳）
一九七三	『雪戦会の日』を江部乙小学校に寄贈する（七十歳）
一九九四	文化勳章を受章する（九十歳）
一九九九	神奈川県相模原市で死去する（九十五歳）